

三郎山論集7（上田女子短期大学 日本語教育研究会・国語研究倶楽部共同機関誌）2000.3

接尾語「的」攷

—語構造と句構造を中心として—

李 仁 淳

一 はじめに

従来「的」という語については、江戸末期のころから、中国の俗語文学の影響と見られる「的」があったと言われる⁽¹⁾。が、現代語的な用法での「的」は、概ね西周の著作に見られる用例を⁽²⁾、その初の例として見ているようである。また、明治以来の「的」の用法⁽³⁾、現代語的な「的」の意味・用法⁽⁴⁾など、接尾語「的」に関する多彩な考究を見出だすことができる。

ところが「的」の上接する語の文法的結合関係に関するものは、あまり見当たらないのである。そこで、本稿では、新村出編『広辞苑』（第四版、1991）に収められている「的」の用例を全て採集し、その語構造と「的」の上接語、とりわけ二字漢語における文法的結合関係、つまり句構造を中心に考察していきたい。

二「的」の用例の採集と語構造⁽⁵⁾

「的」の用例は、多くの辞書類の内、とりわけ『広辞苑』（第四版）収載の語を採集することにする⁽⁶⁾。それは『広辞苑』の自序（第一版）に、

とにかく、簡明にして平易、広汎にして周到、雅語漢語、古語新語、慣用語と新造語、日用語と専門語、旧外来語と新外来語、新聞語と流行語、みなつとめて博載を期した。

とある如く、百科事典的色彩を持つ国語辞典だからである。また、そうした用例は執筆者にとって、一応語形が安定し、日常化が進んだ語であろうと、判断しているからである。

「的」と結合する語を挙げると、次の通りである。

1. 一字漢語+的(25語)

外的 性的 靜的 內的 靈的 公的 強的 動的 法的 狂的 病的 量的 劇的 學的
肉的 史的 私的 詩的 知的 質的 物的 美的 心的 人的 全的

※[標的 目的 射的 權的 監的 金的 端的 頓的 準的]

まず、一字漢語に接尾語「的」の付く語例は「二字漢語+的」のそれに比して、少ないことが知られる。次に、※印の[標的 目的 射的 權的 監的 金的 端的 頓的 準的]は、外形的には「一字漢語+的」という語形であるが、実は、それ自体が一語として成立しているのである。要するに、こうした語例の「的」は、接尾語といえないし、むしろ一字目と二字目の漢語が、それぞれ対等の勢力を持っているといえよう。

その他「強的 監的 頓的」は、それぞれ「豪的 看的 頓敵」のように、両様の語形が見られる。うち「頓的」の「的」は「敵」にも表記されるという事実から、このような「的」は、接尾語の「的」でないということを察しうるだろう。

2. 二字漢語+的(247語)

機械的 世界的 破壞的 社会的 体系的 神經的 典型的 經濟的 國際的 實際的
潛在的 天才的 衛生的 強制的 個性的 自生的 知性的 派生的 野生的 女性的
理性的 潛勢的 準靜的 大大的 相對的 具體的 肉體的 絕對的 立體的 主體的
近代的 現代的 家庭的 決定的 徹底的 否定的 暫定的 革命的 宿命的 致命的
運命的 人為的 反意的 社交的 健康的 人工的 獨創的 理想的 幻想的 系統的
能動的 流動的 衝動的 自動的 壓倒的 活動的 受動的 人道的 戰鬪的 反動的
歸納的 機能的 官能的 本能的 開放的 合法的 一方的 絕望的 啓蒙的 可及的
大衆的 民衆的 本有的 即興的 熱狂的 對症的 對稱的 對照的 抽象的 實証的
末梢的 印象的 感傷的 感情的 論証的 實用的 代表的 比量的 官僚的 效果的
牧歌的 文化的 定期的 投機的 有機的 周期的 悲劇的 意識的 形式的 公式的
組織的 奇跡的 一義的 畫期的 末期的 二義的 無機的 便宜的 化學的 科學的
多角的 哲學的 比較的 本格的 全國的 通俗的 規則的 貴族的 世俗的 生得的
道德的 名目的 盲目的 直詔的 飛躍的 意欲的 消極的 積極的 精力的 魅力的
大陸的 記錄的 閉鎖的 癡作的 政治的 歷史的 副次的 一時的 二次的 微視的
巨視的 原始的 紳士的 排他的 理知的 高壓的 畫一的 自殺的 實質的 物質的
寫實的 現實的 本質的 逆說的 建設的 外罰的 內罰的 內罰的 挑発的 爆発的
自発的 突発的 無罰的 動物の 即物的 芸術的 技述的 効率的 能率的 過渡的

神秘的 進歩的 義務的 事務的 反射的 自主的 保守的 民主的 生理的 功利的
 合理的 物理的 倫理的 論理的 微温的 空間的 肉感的 複眼的 客観的 直感的
 樂觀的 悲観的 主観的 平均的 定言的 封建的 仮言的 試験的 世間的 多元的
 実験的 先験的 選言的 断言的 人間的 生産的 打算的 離散的 精神的 急進的
 超人的 良心的 革新的 個人的 殺人的 優先的 自然的 実践的 必然的 独断的
 尖端的 後天的 重点的 楽天的 古典的 先天的 概念的 観念的 一般的 散文的
 買辦的 断片的 論弁的 拔本的 根本的 浪漫的 平民的 国民的 庶民的 外面的
 内面的 平面的 多面的 一面的 全面的 学問的 理論的

こうした「的」を下接する漢語に対して、遠藤織枝氏は⁽⁷⁾、

(i)「的」を取り除くと語として成り立たなくなるもの、

(ii)「的」がなくても語として存在し、機能をもつもの、

のように、類別している。

(i)に属する用例としては「準静的 可及的 副次的 微視的 巨視的 外罰的 内発的 内罰的 無罰的 即物的 先験的」などを挙げうるし、それ以外は全て(ii)に属するものと思われる。この外「多目的」という語が存するが、これは「多目+的」の語構造ではなく「目的」に「多」の上接したものと思われるので「二字漢語+的」の用例から除くことにする。

語構造の面から見ると「二字漢語+的」の語形が圧倒的に多く、一字漢語と結合ものが、それに次いでいる。

3. 三字漢語+的(10語)

①画時代的 ②前時代的 ③前近代的 ④無意識的 ⑤合目的的 ⑥加速度的 ⑦非論理的 ⑧近視眼的 ⑨非生産的 ⑩超越論的

まず、この10語を語構造の面から見ると、次のようなことが言えるであろうと思う。分析の便宜のために、

a = 純粹に接頭語として働くものと、接頭語的な働きをするもの、

b = 二字漢語

c = 接尾語「的」

d = 一字漢語

のように記号化することにする。

① b、ab(*)、bc、abc

② b、ab(*)、bc、abc

- ③ b、ab(*)、bc、abc
- ④ b、ab、bc、abc
- ⑤ b、ab(*)、bc、abc
- ⑥ b、ab、bc、abc
- ⑦ b、ab(*)、bc、abc
- ⑧ b、bd、bc(*)、bdc
- ⑨ b、ab(*)、bc、abc
- ⑩ b、bd、bc(*)、bdc

例えば「b、ab(*)、bc、abc」において、「b、bc、abc」はそれぞれ単独で、あるいは、bとc、aとbとcが結合して、独立した語として成り立つが、「ab(*)」の場合は、aとbが結合しても語として成立し得ないことを意味する。こうして見ると、「三字漢語+的」の語構造には、

- (I) b、ab(*)、bc、abc : ① ② ③ ⑤ ⑦ ⑨
- (II) b、ab、bc、abc : ④ ⑥
- (III) b、bd、bc(*)、bdc : ⑧ ⑩

のように、三通りのパタンの存することが知られる。

次に、この10語が、それぞれどういう評価を持つものであるか、という点について、考えてみたいと思う。用例で見る如く、接頭語あるいは接頭語的な働きをする接辞が付いている派生語の場合は、その接辞の持つ意義一例えば、プラス的评价を持つか、マイナス的评价のものかによって、語義が決定されるのが多く見られる。

「画時代的」という語は「画期的」に言い換え得るし、「画期的な発明」という用例が存することを考え合わせると、プラス的评价の語であろうと思う。というのは、接頭語に準ずるとされる「画」は、プラス的评价の語に導く働きをするからである。従って「合目的・加速度的」という語の「合」と「加」は、前述の如き流れに沿って考えるのも可能であろう。「超越論的」の場合は「超越」という二字漢語に注目したい。「超越」は同類義の「超」と「越」からなり、やはりプラス的评价の語に近いと思う。

上のような語例に比して「無意識的」の「無」、「非論理的・非生産的」の「非」は、否定的判断を表わす接頭語であるから、マイナス的评价の語であるのは当然のことである。また「前時代的」は「前近代的」とほぼ同義であり、「前近代的」という語は「非近代的」に言い換えることができる。こうしてみると「前」と

いう漢字は、やはり否定的判断を表わす働きをしていると思う。

「近視眼的」は「近視」という漢語と、その二字目の「視」と同類義の「眼」とが結合し、さらに「的」が付いて成り立ったものと思う。この語の場合は「近」という一字目の漢字に、マイナスの意味合いが含まれているのではなかろうか。「近視」の対義語として「遠視」という語が存するが、「遠視眼」または「遠視眼的」という複合語は、存しないのである。要するに「目」というのは、近い所より遠くまで見るのが望ましいという、一種潜在意識が働き、その結果「近」という漢字が否定的な概念を持つようになったのであろうと思う。

4. 四字漢語+的(2語)

幾何級数的 人間中心的

5. 和語+的(3語)

鶴的 取的 浪花節的

6. 外来語+的(3語)

スコラの アポロ的 ディオニュソスの

以上、語構造のパターンをまとめて示すと、次の[表Ⅰ]のようになる。

[表Ⅰ]

語構造	一字漢語+的	二字漢語+的	三字漢語+的	四字漢語+的	和語+的	外来語+的	計
語数	25	247	10	2	3	3	290
%	8.6	85.2	3.5	0.7	1.0	1.0	100

「的」と結合する語は、漢語・和語・外来語など、多様であるが、混種語につくものとか、また句や成語につくものはほとんど見られない。「的」の上接語としては漢語がもっとも多く、その中でも二字漢語が圧倒的多数を占めている。

三「的」の上接する二字漢語の句構造⁽⁸⁾

前述のごとく、「広辞苑」に収められている「的」のつく語のうち、二字漢語が約83%に上るので、ここではその247語を中心に考察していきたい。句構造のパターンとして、林四郎氏は⁽⁹⁾ 各要素の品詞性を重視し、次のように略記している。

名 名詞性の語要素

動 動詞性の語要素

形 形容詞性・形容動詞性の語要素

副 副詞性の語要素

同氏は、また語要素同士の文法的結合関係を「句構造」と称し、各語要素の位置関係を「要素配置」と名付ける。例えば「政治」ということは「政(まつりごと)を治める」という句構造があると考えから、これを品詞名で書くと「名ヲ動スル」となる。そして、出来上がりの語における語要素の位置関係は、名詞が動詞に先行するするので「名動」となる。一方「衛生」ということは「生(いのち)を衛(まも)る」という句構造があり、基本的には「政治」と同じく「名ヲ動スル」というパターンになる。もっとも「衛生」の場合は動詞が名詞に先行するので「動名」となる。こうしてみると「名ヲ動スル」というパターンには「名動」と「動名」のように両様の要素配置が存するわけである。

こうした方法に従って、句構造のパターンを分類してみる。二字漢語における漢字の字義は、森岡健二外四人編『集英社国語辞典』(1993)⁽¹⁰⁾の字義解説を参考した。

[名詞と用言との組み合わせ] (76語)

(1) 名ニ動スル →動 名(12語)

準静 反意 合法 対症 投機 通俗 副次 逆説 即物 合理 先驗 優先

(2) 名ヲ動スル →㉔名 動(13語)

理想 幻想 絶望 啓蒙 文化 意識 化学 意欲 政治 義務 事務 観念 理論

名ヲ動スル →㉕動 名(22語)

衛生 具体 立体 徹底 否定 革命 致命 受動 抽象 感情 定期 周期 画期 発作

排他 画一 写実 論理 超人 殺人 断片 抜本

(3) 名ガ動スル →㉔名 動(1語)

人為

名ガ動スル →㉕動 名(1語)

有機

(4) 動スル名 →動 名(1語)

魅力

(5) 動スル名(主) →動 名(3語)

潜勢 動物 尖端

(6) 名カラ動スル →名 動(1語)

内発

- (7) 名トシテ動スル →名 動(2語)
客観 主観
- (8) 形ナ名 →形 名(17語)
近代 大衆 悲劇 奇跡 多角 哲学 貴族 盲目 大陸 高圧 多元 良心 重点 樂天
散文 平面 多面
- (9) 名ガ形ダ →㊶名 形(1語)
世俗
名ガ形ダ →㊶形 名(2語)
無機 無罰
- [名詞と名詞との組み合わせ] (91語)
- (10) 名₁ノ名₂ →名₁名₂(65語)
世界 社会 体系 神経 国際 実際 天才 個性 知性 野生 女性 理性 肉体 現代
家庭 宿命 系統 人道 機能 官能 本能 一方 民衆 効果 牧歌 公式 一義 末期
二義 本格 全国 消極 積極 歴史 一時 二次 紳士 実質 物質 現実 本質 効率
能率 自主 民主 生理 物理 倫理 空間 肉感 複眼 世間 人間 個人 後天 古典
先天 概念 一般 平民 国民 外面 内面 一面 全面
- (11) 名₁デノ名₂ →名₁名₂(1語)
社交
- (12) 名₁ト名₂(同類義) →名₁名₂(16語)
機械 典型 運命 末梢 印象 官僚 規則 道德 精力 原始 理知 芸術 技術 神秘
精神 根本
- (13) 名₁ト名₂ →名₁名₂(1語)
功利
- (14) 名₁ニヨル名₂ →名₁名₂(5語)
人工 形式 科学 外罰 内罰
- (15) 名₁ダケノ名₂ →名₁名₂(1語)
名目
- (16) 名₁トナル名₂ →名₁名₂(1語)
主体
- (17) 名₁デアル名₂ →名₁名₂(1語)
庶民

[副詞と用言との組み合わせ] (28語)

- (18) 副、動スル → 副 動(27語)
 自生 相対 絶対 暫定 独創 能動 自動 本有 即興 実証 実用 直訳 微視 巨視
 自殺 自発 突発 直感 楽観 悲観 仮言 実験 急進 自然 実践 必然 独断
- (19) 副、形タ → 副 形(1語)
 微温
- [用言と用言との組み合わせ] (49語)
 (20) 動₁シテ動₂スル → 動₁動₂(33語)
 経済 潜在 強制 派生 流動 衝動 圧倒 活動 反動 帰納 開放 対称 対照 感傷
 論証 代表 比量 生得 飛躍 挑発 爆発 過渡 進歩 反射 保守 定言 封建 選言
 断言 革新 買辦 論弁 学問
- (21) 動₁シ動₂スル(同類義) → 動₁動₂(11語)
 破壊 決定 戦闘 組織 比較 記録 閉鎖 建設 試験 生産 離散
- (22) 形₁デ形₂(同類義) → 形₁形₂(5語)
 大大 健康 熱狂 便宜 平均
- [その他] (3語)
 (23) 動スル助動 → 助動 動(1語)
 可及
- (24) 無意味の助字、動スル → 助字 動(1語)
 打算
- (25) 当テ字(1語)
 浪漫

以上、組み合わせ型をまとめて示すと[表Ⅱ]のようになる。

[表Ⅱ]

組み合わせ型	名詞と用言	名詞と名詞	副詞と用言	用言と用言	助動詞と動詞	助字と動詞	当て字	計
語 数	76	91	28	49	1	1	1	247
%	30.8	36.8	11.4	19.8	0.4	0.4	0.4	100

「的」の上接する二字漢語での句構造のパタンは25あるが、(2)、(3)、(9)はそれぞれ二つに分れているので、実際のパタンは28存することになる。

まず「名詞と用言との組み合わせ」は「名ヲ動スル」が㉔と㉕とを、合わせて35語例あり、「形ナ名」というパタンが17語例かぞえる。こうなると「名ヲ動スル」というパタン、中でも、動詞が名詞に先行する語形と「的」が結合するのが、その

逆のものより一般的のように思われる。また、形容詞性・形容動詞性の語要素が名詞性のものと組み合わせる場合は「形」が「名」に先行するのが、普通のようなのである。しかし「名」が「形」に先行し、主語になって「的」と結合するものは、ごく僅かに過ぎない。

次に「名詞と名詞との組み合わせ」は91語例あるが、そのうち「名₁/名₂」というパターンが65語例もあり、同じ名詞同士の組み合わせでは「名₁/名₂」のものが典型的のようなのである。また「名₁ト名₂(同類義)」のごとく、同じ品詞同士でありながら同類義のパターンが16語例に上るということは、特記すべき点であろう。

第三「副詞と用言との組み合わせ」では、28語例のうち「副、動スル」というパターンが27語を占めており、「副、形ダ」のものより一般的であることが知られる。

第四「用言と用言との組み合わせ」においては、49語例のうち「動₁シテ動₂スル」33語、「動₁シ動₂スル(同類義)」11語あり、同じ動詞同士のパターンが中心を成していることを解する。

その外「可及的」のごとく、漢文の訓読より生じた語、無意味の助字「打」と動詞が結合する「打算的」、当て字の「浪漫的」などの例がある。

四 おわりに

これまで「広辞苑」(第四版)に収録されている「的」のつく語例を扱い、語構造と「的」の上接する二字漢語の句構造のパターンを中心に考察してきたが、まとめて示すと、次のようなことがいえるかと思う。

語構造の面において「的」と結合する語は、漢語・外来語・和語などが中心であり、混種語とか「親方の丸的・捕らぬ狸の皮算用的」のごとき句や成語につく例は全く見当たらない。

「的」の上接語としては、漢語がもっとも多く、中でも二字漢語が大部分を占めている。「三字漢語+的」の語例でみると、接頭語または接頭語的な働きをする接辞が付いている場合は、その接辞のもつ意義—どういう評価をもつか—によって語義が決められるのが普通である。

「的」の上接する二字漢語での句構造のパターンは多彩であるが、うち「名詞と用言」「名詞と名詞」「用言と用言」の組み合わせ型が約88%を占めているので、こうした句構造のものが「的」と結合しやすいといえよう。

句構造では「典型・破壊・便宜」のように、大抵同類義の語例ばかりで、そのパ

タンは「名₁ト名₂」「動₁シ動₂スル」「形₁デ形₂」のような同じ品詞同士の組み合わせからなるものが一般的である。もっとも「功利」という漢語は「名₁ト名₂」のパタンに属するが、同類義とはいえないので、異数の扱いにしたほうがよいだろう。しかし、前述のごとく、同じ品詞同士の組み合わせで、なお同じ句構造のパタンに属する語例とはいえ、例えば「東西・増減・貴賤」のような対義のものは全く見られないというのが、ひとつの特徴といえよう。

注

- (1) 広田栄太郎『近代訳語考』（東京堂出版、1969）、286頁参照。
- (2) 西周の文章に見られる「的」の用例を、次にあげておく。
今政事学ト政略トノ関係ハ此兵家ノ戦法ト戦略トモ異ナリテ、全ク觀察的ト実行的トノ區別ナリトシ、…（『政略論』其一、1872～3）
幸福ハ性靈上ト形骸上ト相合スル上ヘ成ルノ論其二…衣食住ヨリ錢貨等ニ至ル外物的ヲ富饒ニ得ルノ幸福ト（同上、1872～3、1877前後とも）
如此キ題号ヲ掲ケハ其主論ノ如何タルヲ論セス、人々其心貪知的ノ性ヲ攪動シテ見ムト欲シ聞カムト欲シ其秘密タル如何ヲ知ラムト欲シ其意思發揮スル…（『秘密説』1874～10）
- (3) 山田巖「発生期における的ということば」（『現代語 論集日本語研究15』有精堂、1983 所収）
- (4) 遠藤織枝「接尾語「的」の意味と用法」日本語教育53号、125頁～138頁参照。
- (5) 語構造というのは「一字漢語+的、和語+的」のように、接尾語「的」と結合した語の構造を意味する。
- (6) 「的」の用例を採集するに当たっては、主に岩波書店辞典編集部編『逆引き広辞苑』（1992）を用いた。その用例は、見出し語（子見出しを含む）を中心に収集しているので「術学的」のように意味記述の項目などに存しうるものまで採集できなかったことは認めざるをえない。
- (7) 遠藤織枝、前掲論文、126頁参照。
- (8) 句構造というのは「的」の上接する二字漢語での語要素同士の文法的結合関係を意味する。
- (9) 林四郎『漢字・語彙・文章の研究へ』（明治書院、1987）、86頁～89頁参照。
- (10) 『集英社国語辞典』は、漢語の造語要素としての漢字母項目があり、その下に字義解説をし、さらに字義ごとに語例を挙げているので、句構造のパタンを類別するのに有効である。本稿での句構造のパタンは、あくまでも筆者の判断によるものであり、見方によって多少の異存はあり得るだろう。しかし、小論の論旨にさほど大きな影響は及ばすまい。

（イ インスン/ 韓国 水原大学校日本語学科 助教授）